

居住地域と環境配慮行動の意思決定過程との関係性について

石井 康平（千葉大学大学院 人文公共学府）

概要：本研究は、霞ヶ浦流域を対象に、住民の環境配慮行動の意思決定過程と居住地域との関係性を示唆するものである。本研究では、茨城県美浦村にて実施した質問紙調査に基づき、107名の住民の回答データを分析した。分析としては、因子分析により、因子を抽出するとともに、共分散構造分析を用いて、意思決定過程を導出した。また、共分散構造分析については、回答者全体の分析に加え、回答者の居住地域から、沿岸部居住者群と内陸部居住者群の区分を設け、2群それぞれについての分析も行った。結果として、回答者の意思決定過程においては、個人行動に関わる合理的意思決定過程と集団行動に関わる情動的意意思決定過程の2種類が観察された。また、沿岸部居住者群と内陸部居住者群の意思決定過程の相違も観察された。本結果より、2種類の意思決定過程が霞ヶ浦流域における特色であることや流域内でも居住地域により意思決定過程の内実が異なることが示唆される。

キーワード：環境配慮行動、居住地域、共分散構造分析、霞ヶ浦

The Relationship Between Residential Areas and Decision-Making Process for Environmentally-Conscious Behavior

Kohei Ishii (Graduate student, Graduate School of Humanities and Studies on Public Affairs, Chiba University)

Abstract: This paper focuses on the Kasumigaura region and suggests the relationship between the decision-making process of environmentally-conscious behavior and residential areas among residents in Kasumigaura basin. The research is based on a questionnaire survey conducted in Miho Village, Ibaraki Prefecture, and the analysis is based on the responses of 107 residents. In terms of analysis, factor analysis was employed to extract factors, and structural covariance analysis was used to derive the decision-making processes. Furthermore, for structural covariance analysis, in addition to the analysis of all respondents, a division was made between coastal area residents and other area residents, and separate analyses were conducted for each group. As a result, two types of decision-making processes were observed in the respondents' decision-making processes: the rational decision-making process related to individual actions and the emotional decision-making process related to collective actions. Additionally, differences in decision-making processes between coastal area residents and other area residents were observed. These results suggest that the two types of decision-making processes are characteristic of the Kasumigaura basin and that the nature of decision-making processes may vary depending on the residential area within the basin.

Keywords: Environmentally-Conscious Behavior, Residential Areas, Covariance Structure Analysis, Kasumigaura

1. はじめに

本研究は、茨城県霞ヶ浦周辺の住民に対する質問紙調査を通じて、居住地域と環境配慮行動の意思決定過程との関係性を示唆するものである。

脇田（2009）[1]では、流域における、各住民の興味や関心は、関係する流域の範囲によって異なることが示唆されている。また、脇田（2009）では、その興味や関心の違いが、流域への問題意識に差異をもたらすことが懸念されており、この流域間における意識の相違を「状況の定義のズレ」

として言及している。筆者は、この脇田（2009）の示唆から、霞ヶ浦流域において、周辺住民が、居住地域の違いにより、環境配慮行動に対する意識において異相が生じると仮定する。そして、本研究では、その異相を意思決定過程の相違として示すことを試みる¹。

2. 先行研究

水辺環境を対象とした環境配慮行動に関する先行研究において、加藤・野波（2010）[4]では、

¹ 本研究は、石井（2023a）[2]及び石井（2023b）[3]の継続研究であり、本研究の調査は、左記2文献と同様である。なお、上記2文献における分析後に、対象者1名から回答があったため、本結果では、左記1名

のデータも分析に含めている。また、後述の本研究における因子分析の結果から抽出された因子は、上記2文献と同様である。

広瀬 (1995) [5] の要因連関モデル²に立脚し、滋賀県琵琶湖周辺住民の環境配慮行動の意思決定過程について、コモンズの連続性認知³を加えたモデルを提唱している。加藤・野波 (2010) のモデルでは、目標意図に関して、地域焦点型目標意図及び問題焦点型目標意図の2種類を、行動意図に関しても、個人行動意図と集団行動意図の2種類を設定している。そして、加藤・野波 (2010) では、目標意図と行動意図との関係性において、「地域焦点型目標意図⇒問題焦点型目標意図⇒行動意図」という連関が示されている。

また、今井・野波・高村 (2010) [6] や今井・野波・高村 (2016) [7] では、ため池における環境配慮行動の意思決定過程が検討され、環境価値に関する因子が目標意図と行動意図のそれぞれに影響することを示している。

3. 調査の概要

3-1. 質問項目の設定

本研究では、前述の通り、霞ヶ浦流域住民に対する質問紙調査を用いる。本調査における質問項目は、前述の加藤・野波 (2010) の項目をもとにして、今井・野波・高村 (2016) にて扱われた環境価値に関する項目を一部援用して設定した⁴。

(1) 行動意図に関する項目

行動意図については、集団行動意図因子及び個人行動意図因子の2因子を得ることを想定して、加藤・野波 (2010) で扱われた項目をもとに、項目を設定した。

(2) 目標意図及びコモンズの連続性認知に関する項目

目標意図については、加藤・野波 (2010) の特徴でもある2種類の目標意図（「地域焦点型目標意図」と「問題焦点型目標意図」）を生かす形で6項目を設定した。設定するにあたり、地域焦点型目標意図の項目に関しては、琵琶湖と表記された箇所を霞ヶ浦に読み替えるとともに、問題焦点型目標意図に関する項目は、加藤・野波 (2010) で

扱われた項目を同形で援用した。

コモンズの連続性認知の項目については、加藤・野波 (2010) では「琵琶湖を守れば、京阪神に住む人たちの飲み水を守ることになる」という淀川下流域住民との連続性を想定した項目や「琵琶湖が汚れると、淀川など下流の川も汚れると思う」という淀川水系との連続性を想定した項目が存在する。本調査では、前者を「霞ヶ浦を守れば、神栖市や銚子市に住む人たちの飲み水を守ることになる」、後者を「霞ヶ浦が汚れると、利根川下流域や銚子海岸なども汚れると思う」という項目に代替した。

また、本調査独自の項目として、霞ヶ浦の洪水防止機能に着目した項目として「洪水などの災害を防止するには、霞ヶ浦流域だけでなく、利根川全域で協力する必要がある」を、周辺地域にとっての生態系サービスに対する連続性を想定項目として「関東周辺の人にとって、霞ヶ浦はレジャーや景観等で重要な役割を果たしている」を追加して設定した。

(3) 環境価値に関する項目

環境価値に関する項目としては、Díaz, et al. (2018) [8] の「Nature's contribution to people (自然がもたらすもの)」(以下、NCP) という概念から着想し、9項目を設定する。なお、以下の4項目については、今井・野波・高村 (2016) の項目を参照し、作成している。

- ・霞ヶ浦は流域の水鳥にとって大切な生息場所である
- ・霞ヶ浦は田んぼに水を引くために欠かすことができない
- ・霞ヶ浦は、散歩やサイクリングなど、気分転換やリフレッシュ、健康のために重要な場である
- ・霞ヶ浦は、幼稚園や小学校の児童に自然体験させる場として、貴重である

(4) その他の規定要因に関する項目

上記以外の規定要因に関する項目については、前述のリスク認知因子、便益費用評価因子、社会

² 広瀬 (1995) の要因連関モデルは、環境配慮行動に至る過程として、目標意図を形成するものと行動意図を形成するものの2種類が存在するとし、目標意図が行動意図を規定するとしたものである。ここでいう、目標意図とは、環境保全に対する目的意識であり、行動意図とは、環境保全の具体的な行動に対する目的意識である。

³ コモンズの連続性認知の定義について、加藤・野波 (2010) は、「ローカル・コモンズとグローバル・コモンズとのつながりに対する個人の意識」と示している。つまり、コモンズの連続性認知とは、地域で共有

された資源に地域的・社会的なつながりがあることを認識する個人の意識のことである。コモンズの連続性認知は、定義の通り、地理的・社会的なつながりを、幅を持って検討することができ、本研究の検討課題である居住地域による意思決定過程の違いに敏感であると仮定した。そこで、本研究では、本概念を援用した。

⁴ 具体的な質問項目については、「Appendix」に「(1) 行動意図に関する質問項目群」～「(4) その他の規定要因に関する質問項目群」にて、項目群ごとの記載があるため、左記を参照のこと。

規範評価因子、地域への帰属意識因子、地域への愛着因子の5因子を想定し、加藤・野波（2010）の項目をおおよそ読み替えて、計18項目を設定した。なお、リスク認知因子に関する項目については、加藤・野波（2010）にて採用された2項目とともに、「気候変動を考慮すると、霞ヶ浦でも洪水等の水害が今後も発生すると思う」と「霞ヶ浦は、今後地震が発生した場合、流域は影響を強く受けると思う」の2項目を新たに設定し、4項目を設定した。

3-2. 調査地域・調査対象者の属性

調査地については、霞ヶ浦流域自治体である茨城県美浦村⁵に設定した。調査対象者の抽出においては、美浦村役場にて住民基本台帳の閲覧を通して、1,057名を無作為に抽出した。調査時期は、2022年8月～10月にかけて、郵送法により実施し、調査票は「霞ヶ浦及び水環境全般に関するアンケート調査」という名で、対象者本人宛に普通郵便で送付した。回答は、郵送回答とインターネット回答の両者を用い、郵送回答では、返信用封筒を使用し、インターネット回答では、調査票にQRコードまたはURLによる回答フォームを用いる形式をとった。

本調査の有効回答数は107名（有効回答率は10%）であり、サンプル数が少なく、母集団を十分に説明しているとは言えない。なお、回答者の属性に関して、性別については、女性が47名（43.9%）、男性が54名（50.5%）、答えたくないが6名（5.6%）であった。また、年齢構成は、年代別に、20代が6名（5.6%）、30代が16名（15.0%）、40代が24名（22.4%）、50代が25名（23.4%）、60代が19名（17.8%）、70代以上が17名（15.0%）であった。加えて、居住地域については、回答者の居住する字をもとにして、2群に区別した。具体的には、居住する字を答える項目において、霞ヶ浦沿岸部と接する字を回答した群を「沿岸部居住者群」、それ以外の字を回答した群を「内陸部居住者群」として区分した。居住地域における回答者の分布は、沿岸部居住者群が45名（42.1%）、内陸部居住者群が62名（57.9%）であった。

⁵ 美浦村は、湖沼水質保全特別措置法第3条第2項の規定に基づく霞ヶ浦（北浦及び常陸利根川を含む）にかかる指定地域として定められている。

⁶ Stataの使用に当たっては、Mehmetoglu, M. and Jakobsen, T. G. (2022) [9]を参照した。なお、後述の共分散構造分析の適合度についても、にて述べられている基準値から、モデルの適合を判断した。後述の共分

4. 分析結果

4-1. 因子分析

本研究では、まず、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。統計ソフトStata⁶を用いて、固有値1、因子負荷量0.3以上を基準として分析した結果、以下の9因子が得られた⁷。以下の表1において、この得られた9因子と、下図における表記上の略称を記載する。

表1 本研究で取り扱う因子
Table 1 Factors addressed in this study.

質問項目群	因子名	下図における略称
行動意図	個人行動意図	PBI
	集団行動意図	GBI
目標意図・コモンズの連続性認知	目標意図	GI
	コモンズの連続性認知	PCC
環境価値	霞ヶ浦がもたらすもの	NCP
その他の規定要因	環境リスク認知	PSEP
	生活影響評価	LIE
	霞ヶ浦に対する愛着	AR
	地域への好感	PR

4-2. 共分散構造分析

上記の因子分析の結果から因子得点を算出し、合成変数を形成して、共分散構造分析を行う。

本研究の回答者全体に対して行った分析結果は以下の図1の通りである。なお、本モデルの構築に当たっては、「霞ヶ浦がもたらすもの⇒コモンズの連続性認知⇒目標意図⇒個人行動意図・集団行動意図」の連関を仮定して、探索的に行った。

本モデルの適合度は、RMSEA値が0.087、CFI値が0.954、TFI値が0.924、SRMR値が0.115であった。SRMR値が0.1以下でないことから、本モデルが、完全な適合を示したモデルとは言えない。しかしながら、他の探索したモデルに比べて、適合度が高いため、本モデルを回答者の分析における最終モデルとして設定した。また、本結果を観察すると、個人行動意図と集団行動意図の形成

共分散構造分析のモデル適合度について、具体的には、RMSEA値及びSRMR値が0.1以下、CFI値とTFI値が0.9以上を基準としている。

⁷ 後述の「Appendix」では、各質問項目が、9因子のどの因子で説明されているのかを記載しているため、具体的な質問項目については、左記を参照のこと。

過程が分化できるため、前者を、個人行動意図を形成する合理的意思決定過程、後者を、集団行動意図を形成する情動的意意思決定過程として設定する⁸。

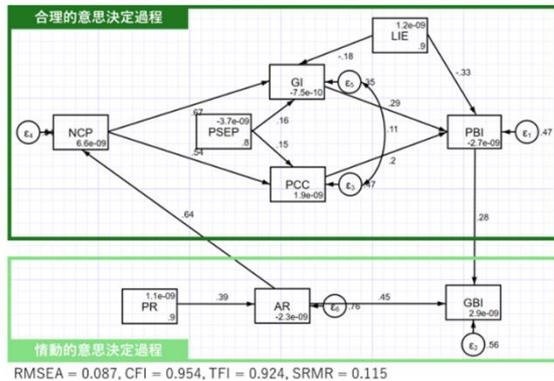


図 1 回答者全体の意思決定過程[10]
Figure 1 Decision-making process of whole population.

また、以下では、沿岸部居住者群と内陸部居住者群それぞれについてモデルを設定した。モデルの設定に当たっては、回答者全体に対する分析結果を基盤として、この2群における意思決定過程を、探索的に分析した。以下では、2群について、共分散構造分析の結果から得られた各々のモデルを説明する。

まず、沿岸部居住者群について、共分散構造分析の結果から得られたモデルは、図2の通りである。本モデルの適合度は、RMSEA値が0.159、CFI値が0.874、TFI値が0.827、SRMR値が0.163であった。で示された基準に照らすと、いずれの値も適合を示しているとは言えないが、他の探索したモデルと比較して、適合度が高いため、本モデルを沿岸部居住者群の分析における最終モデルとして設定した。本モデルでは、合理的意意思決定過程として、「霞ヶ浦がもたらすもの⇒目標意図⇒コモンズの連続性認知⇒個人行動意図」という連関が観察された。対して、情動的意意思決定過程においては、回答者全体の分析と同様の連関が観察された。

次に、内陸部居住者群について述べる。共分散構造分析の結果の結果は、図3の通りである。本モデルの適合度は、RMSEA値が0.075、CFI値が0.965、TFI値が0.944、SRMR値が0.121であった。回答者全体の分析と同様に、SRMR値が0.1以下でないことから、完全に適合を示したモデル

とは言えないが、他の探索したモデルと比較して、本モデルの適合度が高いため、内陸部居住者群の分析における最終モデルとして設定した。本モデルにおいては、合理的意意思決定過程では、「霞ヶ浦がもたらすもの⇒コモンズの連続性認知⇒目標意図⇒個人行動意図」という連関が見られた。また、情動的意意思決定過程においては、回答者全体の分析や沿岸部居住者群と同様に、「地域への好感⇒霞ヶ浦に対する愛着⇒集団行動意図」という連関が観察された。

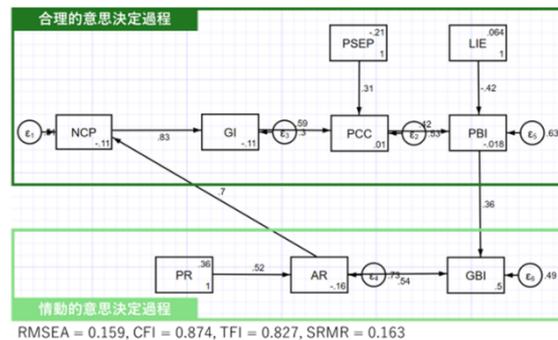


図 2 沿岸部居住者群の意思決定過程
Figure 2 Decision-making process of a group of coastal residents.

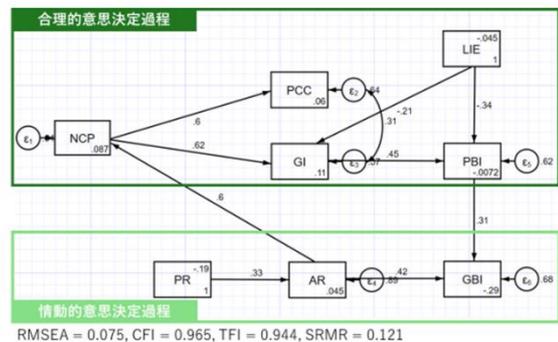


図 3 内陸部居住者群の意思決定過程
Figure 3 Decision-making process of a group of inland residents.

5. 考察

まず、本研究の回答者全体・沿岸部居住者群・内陸部居住者群の結果を通して、共通する点を以下に述べる。本研究では、いずれの分析結果においても、野波・池内・加藤（2002）で示された合理的意意思決定過程と情動的意意思決定過程のように、個人行動意図と集団行動意図の形成プロセス

⁸ 野波・池内・加藤（2002）[11]では、個人行動意図をもたらす要因として一般的態度（目標意図に同じ）を、集団行動意図をもたらす要因として愛着を示し、

前者を合理的意意思決定過程、後者を情動的意意思決定過程として区分した。本研究においても、この2種類に区分可能なため、本2区分を採用した。

に違いが見られた。以下では、それぞれの意思決定過程について詳述する。

まず、合理的意思決定過程については、回答者全体の分析において、霞ヶ浦がもたらすものがコモنزの連続性認知と目標意図それぞれに影響し、コモنزの連続性認知と目標意図が相互に関連するとともに、両者が個人行動意図に影響するという関連が見られた。また、沿岸部居住者群では、霞ヶ浦がもたらすものが、目標意図に影響し、コモنزの連続性認知が個人行動意図に影響するという直線的な関連が見られた。加えて、内陸部居住者群では、霞ヶ浦がもたらすものが、目標意図とコモنزの連続性認知の両者に影響し、その両者が相互に関連するとともに、目標意図のみが個人行動意図に影響を示した。ここから、各々のモデルにおいては、細かな差異が見られている。しかしながら、総括した場合には、「霞ヶ浦がもたらすもの⇒コモنزの連続性認知・目標意図⇒個人行動意図」という3段階が考えられ、この意思決定の段階については共通性が見受けられる。

また、情動的意決定過程については、「地域への好感⇒霞ヶ浦に対する愛着⇒集団行動意図」という関連が、いずれのモデルにも共通していた。また、いずれのモデルにおいても、「霞ヶ浦に対する愛着」は、「霞ヶ浦がもたらすもの」への影響があり、合理的意決定過程と情動的意決定過程が、乖離したものではないことも示唆される。

次に、以下では、沿岸部居住者群と内陸部居住者群の意思決定過程間の比較を行う。まず、コモنزの連続性認知・目標意図及び個人行動意図との関係性について述べる。前述の通り、合理的意決定過程を段階的に観察した場合には、「霞ヶ浦がもたらすもの⇒コモنزの連続性認知・目標意図⇒個人行動意図」という3段階が想定できる。しかしながら、コモنزの連続性認知・目標意図間の関係性と個人行動意図に影響する様相について、焦点化した場合には、相違が生じている。まず、沿岸部居住者群では、コモنزの連続性認知と目標意図の関係性について、「目標意図⇒コモنزの連続性認知」という関連が観察される。また、個人行動意図との関係性で言えば、個人行動意図に影響しているのは、コモنزの連続性認知である。それに対して、内陸部居住者群では、コモنزの連続性認知と目標意図の関係性において、「コモنزの連続性認知⇔目標意図」という相互関連が観察される。また、個人行動意図との関係性で言えば、個人行動意図に影響しているのは、目標意図である。この結果から、沿岸部居住者群と内陸部居住者群間で、コモنزの連続性認知と目標意図の役割が相違していると見なすことができる。つまり、沿岸部居住者群で言えば、

個人行動意図を促進する要因は、コモنزの連続性認知であり、また、コモنزの連続性認知を促進する要因としての役割を目標意図が担っていることになる。対して、内陸部居住者群では、個人行動意図を促進するのは、目標意図であり、その目標意図を相互に関連することにより促進する役割をコモنزの連続性認知が担っていると考えられる。このように考えると、個人行動意図に直接的影響する要因が、沿岸部居住者群と内陸部居住者群で異なるため、個人行動意図を促進するアプローチにおいては、沿岸部居住者群と内陸部居住者群で異なるアプローチがなされる必要性が想起される。

次に、環境リスク認知について言及する。環境リスク認知について、沿岸部居住者群では、意思決定過程内に含まれたが、内陸部居住者群では、いずれの因子にも影響せず、意思決定過程から除かれる結果となった。本研究における環境リスク認知は、水害など自然災害における流域への影響の認知を聞いた項目から構成されている。霞ヶ浦における自然災害の影響を強く受けると予測される沿岸部居住者群では、環境リスク認知と環境配慮行動が、意識的に結びついていると解釈でき、この点は、脇田(2009)における「状況の定義のズレ」に相当すると考えられる。

しかしながら、上記の分析結果は、あくまでも調査地域における結果であり、また、前述の通り、調査地域においても回答者を十分に説明しているとは言えない。この点から、他の地域や他の調査地においても同様の特徴を持つのか、また、より回答者を適切に説明できた場合にどのような結果となるのか、継続的に調査を行う必要がある。

6. まとめ

本研究のまとめとして、本結果から示唆される事柄を、以下に3点記述する。

まず、1点目としては、環境価値に関する因子(本研究では、霞ヶ浦がもたらすもの)が、コモنزの連続性認知に影響する可能性が示されたことである。先行研究として、加藤・野波(2010)では、コモنزの連続性認知が、今井・野波・高村(2010)と今井・野波・高村(2016)では、環境価値に関する因子が、それぞれ環境配慮行動の意思決定過程に関係することが示されている。本研究では、先行研究にて個別に扱われていたコモنزの連続性認知と環境価値を、意思決定過程の内部で統合し、新たな関連を示唆している。

また、2点目として、回答者全体、沿岸部居住者群、内陸部居住者群、いずれにおいても散見された2種類の意思決定過程が、本調査地域における環境配慮行動の意思決定過程の地域的特色である可能性が考えられる。つまり、本調査地域で

は、環境配慮行動の意思決定において、合理的過程と情動的過程を併せ持つと考えられる。そして、このことから、筆者は、環境配慮行動の促進政策においても、地域の環境配慮行動の意思決定プロセスの特色を踏まえる必要性を強調したい。加えて、霞ヶ浦流域においては、この合理的意思決定過程と情動的意思決定過程が促進されるよう、政策を策定していく必要性も同時に指摘したい。

最後に、3点目として、沿岸部居住者群と内陸部居住者群で、意思決定過程に相違が生じたことを挙げる。この相違を考慮すると、同じ流域内においても、どのスケールに関係するかによって、環境配慮行動の意思決定過程に相違が生じる可能性がある。流域の環境配慮行動促進政策においても、流域内に認識の相違が生じることを想定する必要性を強調する。

また、以下では、本研究の限界と今後の展望を述べる。本研究の限界として、本研究にて得られた結果や考察は、あくまでも美浦村内部の議論であり、その内部でも少数者のデータであることが挙げられる。今後は、調査において回答者を増やす手法を検討するとともに、霞ヶ浦流域に属する他の市町村や他の地域にて、調査を継続する必要がある。そして、霞ヶ浦流域においてそれぞれの調査地域における環境配慮行動の意思決定過程の特性を導出し、流域内を包括的した環境配慮行動を検討していくことが、今後の展望として求められることを強調し、本稿の結びとする。

Appendix

(1) 行動意図に関する質問項目群

表 2 行動意図に関する質問項目
Table 2 Question items related to Behavioral Intention.

個人 行動意図	家では、残り汁や油はふき取るなどして、流しに流さず処理したい
	霞ヶ浦や河川への負荷を考え、私の家では洗剤を正しい量で使いたい
	霞ヶ浦への負荷が軽くなるよう、家の炊事・洗濯を工夫したい
集団 行動意図	個人的に、霞ヶ浦の湖岸や水路のごみを拾うなどところがけたい
	霞ヶ浦の環境を守る団体活動に、参加しようと思う
	行政がおこなう霞ヶ浦の環境保全の計画作りに、自分も参加したい

	霞ヶ浦の水や湖岸をきれいにする集落活動へ、積極的に参加したい
--	--------------------------------

(2) 目標意図及びコモنزの連続性認知に関する質問項目群

表 3 目標意図及びコモنزの連続性認知に関する質問項目

Table 3 Question items related to Goal Intention and Perception of the Continuity of Commons.

目標意図	霞ヶ浦の環境を守ることは、住民の大切な義務である
	できるだけ霞ヶ浦を汚さない暮らしをするべきだ
	霞ヶ浦の自然を大切に守りたい
	できるだけ水質を悪化させない暮らしをするべきだ
	水の環境を守ることは、私たちの大切な義務である
	水辺の自然を大切に守りたい
コモنزの 連続性認知	霞ヶ浦を守れば、神栖市や銚子市に住む人たちの飲み水を守ることになる
	霞ヶ浦が汚れると、利根川下流域や銚子海岸なども汚れると思う
	洪水などの災害を防止するには、霞ヶ浦流域だけでなく、利根川全域で協力する必要がある
	関東周辺の人にとって、霞ヶ浦はレジャーや景観等で重要な役割を果たしている

(3) 環境価値に関する質問群

表 4 環境価値に関する質問項目
Table 4 Question items related to Environmental Value.

霞ヶ浦がもたらすもの	霞ヶ浦は流域の水鳥にとって大切な生息場所である
	霞ヶ浦は、流域の治水や気温調整の機能を果たしている
	霞ヶ浦は周辺流域の洪水防止に役立っている
	霞ヶ浦でとれるレンコンやワカサギなどの食料は、日々の食生活にとって重要である
	霞ヶ浦は田んぼに水を引くために欠かすことができない

	霞ヶ浦に生息するアシなどの植物は原材料として活用できる
	霞ヶ浦の美しい景観を保全していく必要がある
	霞ヶ浦は、散歩やサイクリングなど、気分転換やリフレッシュ、健康のために重要な場である
	霞ヶ浦は、幼稚園や小学校の児童に自然体験させる場として、貴重である

	い
	近所の人たちは、霞ヶ浦の環境保全に熱心だと思う。
	私の知人には、霞ヶ浦の自然を守りたいと考えている人が多い。

(4) その他の規定要因に関する質問項目群

表 5 その他の規定要因に関する質問項目

Table 5 Question items related to Others

リスク認知	気候変動を考えると、霞ヶ浦でも洪水等の水害が今後も発生すると思う
	霞ヶ浦は、今後地震が発生した場合、流域は影響を強く受けると思う
生活影響評価	下水道が整ったのに、日ごろの生活で霞ヶ浦に配慮するのは面倒だ
	下水道があるのに、家で汁物や油を流さずふき取るのは面倒だ。
	霞ヶ浦に配慮するため、家で炊事・洗濯を工夫するのは面倒だ。
	霞ヶ浦が汚れたとしても、自分の生活への影響はあまりない
	霞ヶ浦の汚れで生活に障害があるととしても、まだ先のことだ
地域環境に対する愛着	霞ヶ浦に対して、愛着を持っている
	霞ヶ浦には、思い入れがある
地域への好感	霞ヶ浦は、私にとって重要なものである
	自分の住む集落の一員であることを誇らしく思う
	自分の住む集落に愛着を持っている
	この先も、自分の住む集落にずっと住みたいと思う
	自分の住む集落と強い結びつきを感じることもある
	自分の住む集落にはいい人が多い

謝辞

まず、質問紙調査にあたり、美浦村役場ご担当者様や回答者の皆様はじめ多くの皆様にご協力を賜りましたこと、謹んで感謝の意を表します。

また、調査の実施及びデータ分析にあたり、丁寧なご指導を賜りました倉阪秀史教授（千葉大学社会科学研究院）及び、本稿の作成にあたり、ご指導を賜りました小風尚樹助教（千葉大学人文科学研究院）、亀田堯宙特任助教（国立歴史民俗博物館研究部）に深謝致します。

加えまして、本年度の千葉大学卓越大学院プログラム「アジア・ユーラシアグローバルリーダー養成のための臨床人文学教育プログラム」合同コロキウムにおいて、主催頂きました伊藤正彦教授（熊本大学大学院人文社会科学部）はじめ熊本大学の諸先生方、また、本プログラムに協賛の長崎大学及び岡山大学の諸先生方、有益なご意見をくださいましたプログラム参加者の皆様に御礼申し上げます。

最後に、日頃よりご支援賜っております、山田賢教授（千葉大学大学院人文科学研究院）、米村千代教授（千葉大学大学院人文科学研究院）、後藤真准教授（国立歴史民俗博物館研究部）、添田様（千葉大学人社系学務課大学院学務室）におかれましても、この場をお借りして御礼申し上げます。

参考文献

- [1] 脇田健一：「階層化された流域管理」とは何か、谷内茂雄、脇田健一、原雄一ほか編著、流域環境学—流域ガバナンスの理論と実践、京都大学学術出版会、pp.47-62 (2009)。
- [2] 石井康平：社会的属性及び生活の質が環境配慮行動の規定要因に与える影響—霞ヶ浦における質問紙調査を手掛かりとして、公共研究、Vol.19, No.1, pp.157-205 (2023a)。
- [3] 石井康平：モデル構築のための因子分析—環境配慮行動の規定要因に関する研究を題材として、研究報告人文科学とコンピュータ (CH), Vol.2023-CH-132, No.8, pp.1-7 (2023b)。
- [4] 加藤潤三、野波寛：2種類の目標意図およびコモンズの連続性認知が地域住民の環境配慮行動に及ぼす影響：琵琶湖流域住民の地域環境保全の意思決定過程、実験社会心理学研究、Vol.49, No.2, pp.194-204 (2010)。
- [5] 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学—共益と私益のジレンマ、名古屋大学出版会 (2016)。
- [6] 今井葉子、野波寛、高村典子：コモンズの重層的価値が環境配慮行動に及ぼす影響：農家と

- 非農家によるため池の農業価値と環境価値に対する評価, 保全生態学研究, Vol.28, pp.219-224 (2016).
- [7] 今井葉子, 野波寛, 高村典子 : ため池に対する価値観が環境保全の態度と行動意図に与える影響－兵庫県東播磨地域における社会心理学的研究－, 農村計画学会誌, Vol.21, No.1, pp.1-14 (2010).
- [8] Díaz, S. et al.: Assessing nature's contributions to people, *Science*, Vol.359, No.6373, pp.270-271 (2018).
- [9] Mehmetoglu, M. and Jakobsen, T. G.: *APPLIED STATISTICS USING STATA A Guide for the Social Sciences* Second edition, SAGE (2022).
- [10] Kohei, I.: Decision-making Process of Environmentally-conscious Behavior in Lake Kasumigaura, PNC 2023 Annual Conference and Joint Meetings, (2023).
- [11] 野波寛, 池内裕美, 加藤潤三 : コモンズとしての河川に対する環境配慮行動の規定因: 集団行動と個人行動における情動的意思決定と合理的意思決定, 関西学院大学社会学部紀要, Vol.92, pp. 63-75 (2002).